

石垣の中の博物館

仙台城の調査から

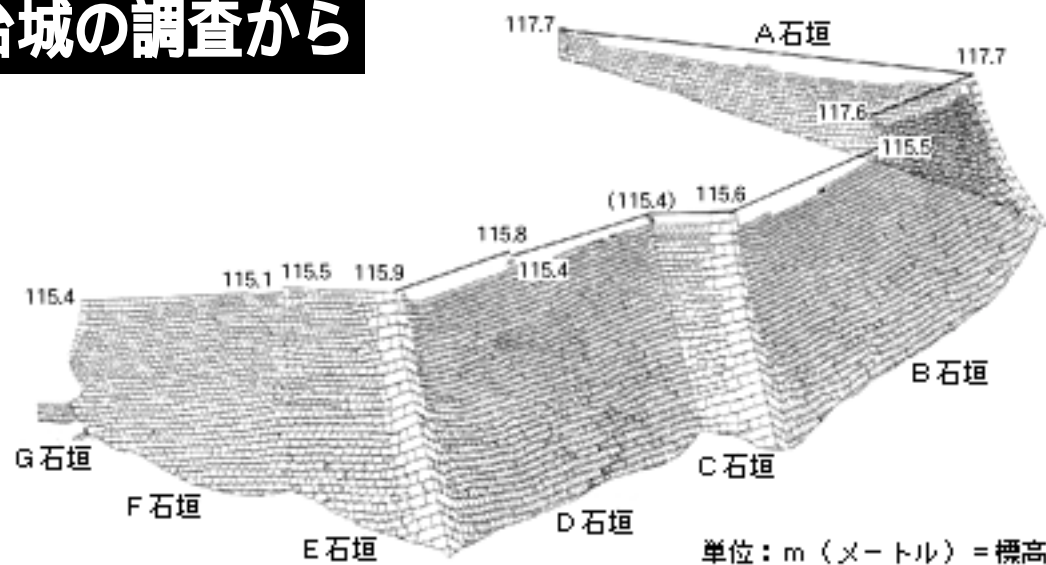


図1；工事の対象となる本丸石垣の3D

伊達氏の居城だった仙台城跡は現在、青葉山公園となり、市民や観光客の憩いの場となっている。仙台市ではこの公園を整備するため、傷みの激しい本丸北壁の解体修理工事に着手した。石垣の解体に伴い、城跡の調査が開始され、いくつもの新知見を提供している。その中から、いくつかを紹介してみたい。なお、詳しくは、<http://www.city.sendai.jp>を参照されたい。



写真；政宗時代の石垣

現石垣中から見つかった古い石垣。伊達政宗の仙台築城期の石垣の一部とみられる。裏込め石は層が薄く、「石を積む」というより、「石を貼る」という表現のほうが相応しいのでは、と思わせる。

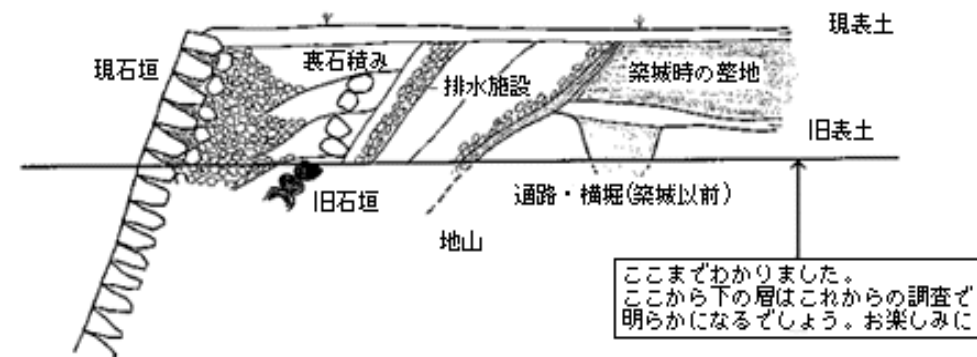


図2；本丸石垣北面断面

現石垣を外していくと、古い石垣が内部から現れた。現石垣以前に、少なくとも2時期の大規模な改修のあったことがわかる。それは元和2(1616)年、寛文8(1668)年の大地震が契機になっているとみられる。

元和2年の場合、仙台湾を震源とするM7.0規模の大地震が想定されている。また正保3(1646)年に直下型地震によって本丸が悉く崩壊し、部分修復が成ったところに、寛文8年の大地震が追い打ちをかけた格好になったようである。

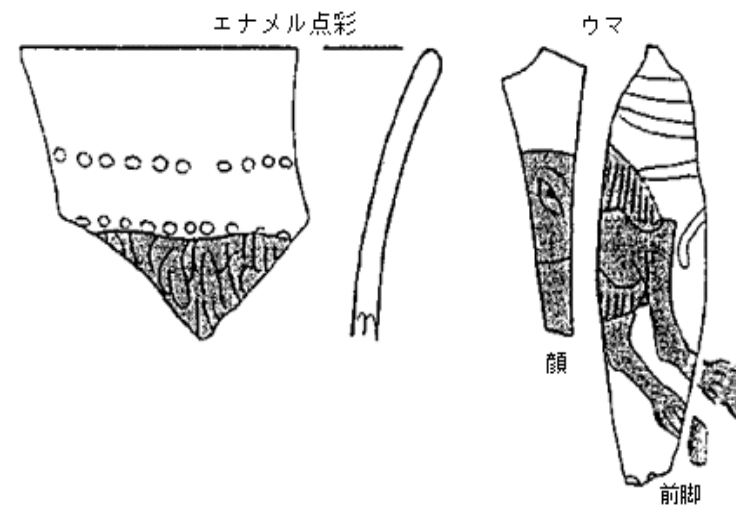


図3；出土した「コブレット」片

馬の絵が描かれている。エナメル点彩を施しており、西洋産の可能性が高い。伊達政宗がローマ法王のもとに遣わした支倉常長の招来した品物であろうか。

石垣解体に先立つ、本丸の曲輪内部や石垣基部の調査では、数多くの遺物が出土している。上図は、その遺物の1つである。これらの調査では、ガラス製品が大量に出土しているが、中にはヴェネチアもしくはボヘミア産の製品とみられものが含まれている(『第16回全国城郭研究者セミナー資料』)。このほかにも、陶磁器、水晶、漆器なども多い。陶磁器の年代観は17世紀前半でおさまるものである。このことから遺構のあり方は、元和2年の大地震で本丸御殿が倒壊し、そこに納められていた優品の多くが、そのまま曲輪内や石垣の下に投棄された状況を示しているのであろう。

出展；図1～3 <http://www.city.sendai.jp>より
参考；我妻仁「仙台城」(「第1回北日本近世城郭検討会」での報告)



「城踏」の様子